

# オーストラリアのアフリカ人難民をめぐる 「社会統合」に関する一考察 ——人道支援の与え手と受け手の関係に着目して

栗田梨津子\*

## <要旨>

本稿では、人道主義プログラムの下、オーストラリアへの再定住を認められたアフリカ人難民と彼らの「社会統合」に向けた支援を行う教会の白人との力関係に着目し、両者の相互作用の中で構築される「難民性」とそれへの難民の対応を明らかにする。主流社会のメディア等において、アフリカ人難民は、脆弱性と暴力性の双方を内包する存在としてのイメージが流布され、「正常性」の基準となる白人とは本質的に異なる集団として描写された。さらに、難民をめぐる脆弱性と暴力性は不可分な関係でありながらも、主流社会では脆弱な難民像の方が肯定的に受容され、難民は白人からの支援を受動的に享受し、それに謝意を示し、返礼すべきであるという難民をめぐる理想像が構築されていた。

このようにメディア等で構築された難民像は、アフリカ人難民への支援を行う教会の白人によっても共有されていた。彼らはアフリカ人難民が理想の難民像に従い続ける限り、難民との間に関係を築こうとしたが、そうではない場合、難民は単に文化的に異質な存在として他者化され、関係が断絶された。このような無償の支援の送り手としての白人の権威に対し、アフリカ人難民の側は、真っ向から対峙するのではなく、白人との対話的な相互作用を通して、時には脆弱な難民を演じ、良好な関係を築きながら許された範囲内で自分たちの要求を伝えることもあった。それは、今後もオーストラリアで生きることを選択したアフリカ人難民が、主流社会で平穏に生活するためにとり得る最も現実的な対応であるといえる。そしてそのような対応は、主流社会と難民による双方向的な文化適応を目指そうとする白人の協力を得ながら、両者間に支援の与え手対受け手という従来の図式を超えた新たな関係をもたらす可能性を有している。

---

キーワード：アフリカ難民、社会統合、人道支援、教会、オーストラリア

\*KURITA Ritsuko 神奈川大学 kurita@kanagawa-u.ac.jp

## 1 はじめに

母国での内戦や紛争などにより移動を強制され、難民化した人々は、アジアやアフリカを中心に増加の一途にある。難民に与えられる将来の選択肢としては、①母国への帰還、②第三国（主に欧米先進国）への再定住、③受け入れ国に難民として滞在、が挙げられるが〔栗本 2004: 141〕、①以外の場合、受け入れ先での難民の「社会統合 (integration)」をめぐる問題が浮上することが多い。本稿では、②のケースのうち、オーストラリアへの再定住を認められたアフリカ人難民をめぐる「社会統合」の問題を取り上げ、難民と主流社会の関係について考察する。

アメリカ合衆国やカナダ、オーストラリアをはじめとする西洋先進諸国は、人道主義政策の下、アフリカやアジアをはじめとする地域から多数の難民を積極的に受け入れてきた。これらの国々において、難民は受け入れ当初、白人社会からの支援を必要とする「脆弱な」存在とみなされ、主流社会での生活を支援するための住宅や医療等のさまざまなサービスが提供される。しかし、一定期間を過ぎると、彼らは社会経済的に自立し、主流社会への「社会統合」を果たすことが要請される。一方で、白人が多数派を占める欧米社会において、難民の中でもとりわけアフリカ人難民は、その身体的・文化的特徴の可視性ゆえに「異質な他者」として分類され、人種差別や偏見による社会的排除を経験しやすい〔Danso 2001; Lino Lejukole 2008; Majavu 2017〕。

こうした西洋先進諸国における難民をめぐる状況を受けて、法学や政治学分野における難民の支援や援助のあり方に関して論じた難民研究では、雇用・教育制度等において、難民の「社会統合」を阻む様々な要因が考察されてきた。このような難民の支援をめぐる制度的な問題について、支援を提供する側、すなわち「上からの」視点で論じた研究に対し、人類学では、難民自身の行動や語りに着目しながら「下から」の視点に立ち、難民というカテゴリーに伴う受身で脆弱な犠牲者としてのイメージに回収されない難民の姿に焦点が当てられた。そして国際難民支援組織や主流社会のメディア等によって構築された「脆弱性」への難民の対応や、困難な状況に対処しようとする難民の主体性への着目の必要性が主張されてきた〔栗本 2004; 久保 2010〕。とりわけ栗本英世は、「下から」の視点に立った人類学における難民研究の主要な課題として、①難民の「苦難の経験」の分析、②難民キャンプにおける国際支援組織の実践とそれへの難民自身の対応、③新たな環境への適応と生活世界の再構築、を挙げている〔栗本 2004: 147-148〕。

人類学において苦闘に立ち向かおうとする難民の主体性に着目することの重要性は疑う余地もない。しかし、白人が政治的、経済的に圧倒的に優位な立場にあるオーストラリアにおいて、人道ビザ<sup>1</sup>で入国した難民は、その立場ゆえに差別や貧困などの不利な状況を

1 難民保護という国際的役割を果たすために一部の国々によって許可されるビザを指す。オーストラリアでは、申請時にオーストラリア国外に居住し、母国で実態的差別や人権侵害を受け、オーストラリアでの受け入れの支援を期待できるプロポーザー（オーストラリア国民や同国に本拠をおく組織など）を有する場合に提供される。このビザが許可された場合、申請者は直近の家族と共に永住する権利を付与される〔Australian Government, Department of Home Affairs〕。

甘受することを主流社会から求められやすい。そこには「社会統合」に向けて奮闘する難民の主体性をも阻むような不均衡な力関係が存在し、そのような力関係が人道主義をめぐるレトリックの下で隠蔽されていることも見逃せない。

そこで本稿では、まずオーストラリア主流社会で要請される「社会統合」が何を意味するのか、その内実を踏まえた上で、「社会統合」に向けた支援を行う主流社会の白人とアフリカ人難民側の力関係に着目し、両者の相互作用の中で構築される「難民性」（後に詳述）とそれへの難民の対応を明らかにする。

このような目的のもと、以下ではまず、人道主義が孕む諸問題について論じた人類学的研究およびオーストラリアの難民研究の動向を踏まえた上で、オーストラリア社会におけるアフリカ人難民の位置づけを明らかにする。次に、メディア等でのアフリカ人難民の表象を基にオーストラリア社会におけるアフリカ人難民の受け止められ方について分析する。そして、これまで主流社会で主に難民の「社会統合」の支援を行ってきた教会とそれへのアフリカ人難民の対応について、アフリカ人難民の多数を占めるスーダン人とブルンジ人の事例を基に、人道的支援の与え手と受け手という力関係の観点から考察する。

本稿は、筆者が2014年からオーストラリアのアデレード北部郊外で断続的に行ってきた現地調査で得たデータに基づいている。オーストラリアに再定住した難民の調査にあたっては、オーストラリア人研究者の場合、政府系の難民支援組織や大学によって定められた人権の保護をはじめとする厳しい調査倫理規定に従うことが要求される。具体的には、所属する大学の人を対象とした研究の倫理委員会（human research ethics committee）に調査願や調査計画書等の書類を提出することになっているが、許可がおりるまでは数年以上の期間を要することもある。調査が許可され、調査結果を論文等で発表した際に、調査倫理規定の違反等により、インフォーマントに何らかの不利益が生じた場合、インフォーマントは倫理委員会に対し不服を申し立てることができる。

一方で、オーストラリアの大学に在籍しない筆者のような研究者がオーストラリアの難民を対象とした研究を実施する場合、同国の調査倫理の基準を満たしていれば、上記のような倫理委員会での審査を経ることは必ずしも求められていない。しかし、アフリカ人難民の中には、筆者がオーストラリアの大学における倫理委員会の審査を通過していないことを理由に、調査への協力を拒む人も存在した。また、調査への協力の同意が得られた場合でも、インタビューの際には、話の内容に応じてICレコーダーの使用を控えるように当事者から求められるなど、調査の遂行に制約が伴うこともあった。本稿は、そのような条件付きで調査に応じてくれたアフリカ人難民自助組織とアフリカ人難民への支援を提供してきた英国国教会の関係者への聞き取り調査に基づいている。調査にあたっては、オーストラリアの大学が定める調査倫理規定に従い、調査の目的や内容、提供された情報の公開の方法について、事前にインフォーマントに説明を行い、同意を得た。なお、調査協力が得られたアフリカ人難民のインフォーマントは、比較的高学歴で英語を流暢に話せる人々に限られていることを記しておく。

本稿における「白人」、「スーダン難民」、「南スーダン人」という言葉の用い方について

説明が必要であろう。オーストラリアにおいて「白人」とは、主にイギリス、アイルランド、スコットランドなどのアングロ・ケルト系の人々を指すが、「膚の白い」南ヨーロッパ系、東ヨーロッパ系移民が含まれることもあり、その範囲は状況依存的であるといえる [Stratton 2011: 17]。このような恣意性を有しながらも、オーストラリアでは先住民やアジア系移民等のエスニック・マイノリティとの対比においてこのカテゴリーが用いられることを踏まえ、本稿で「白人」、「白人社会」を用いるときは、オーストラリアで一般に政治的・社会経済的に優位な立場にあるアングロ・ケルト系の人々およびこれらの人々によって構成される社会のことを意味する。

また、オーストラリアにおいて、スーダンから人道ビザで渡豪した人々は一般に「スーダン難民」或いは「スーダン人」と呼ばれているため、本稿でもその呼称を用いる。ただし、オーストラリアに居住する「スーダン難民」あるいは「スーダン人」の大半を占めるスーダン南部出身者と、スーダン北部出身者との差異を強調する必要がある文脈では、「南スーダン人」という呼称を用いることにする。

## 2 難民に関する人類学的研究

### 2-1 人道主義に関する研究

近年、人類学では紛争地域出身の難民等に対する人道主義に内在する矛盾や暴力性の問題が議論されている。中でも人道主義の道徳的側面と政治活動との関係に着目した研究によると、現代の政治には、貧困や戦争などによって不利な立場におかれた他者の苦しみに対する人々の「共感の動員 (the mobilization of empathy)」が不可欠である。そして今や人道主義は、先進諸国による第三世界への支援という枠組みを超えて、自身を人道的とみなす組織が人間を管理するための言説や実践を正当化するための強力な手段となっている。人道主義は、支援の提供者が自分たちよりも貧しく、不運で脆弱な人を助けるという不平等性と、苦難に見舞われた人々を同じ人間、すなわち仲間として認め、助け合うという連帯性という二つの側面から成るが、両者は往々にして緊張関係にあることが指摘されている [Fassin 2012; Feldman & Ticktin 2010]。

特に、連帯性よりも不平等性の側面の方が勝った場合、人道主義の下で提供される無償の贈物は、贈物の受け手を送り手へと従属させることもある。こうした人道的支援の与え手と受け手の不均衡な力関係について、Richard Wilson らによると、人道主義は、人権のように強固な法的基盤を持たず、慈悲心、同情、共感などの感情に由来する道徳的主張であるため、人道的支援の受け手は与え手の道徳的衝動に依拠し、自分たちの運命を自身で積極的に決定することが困難になる。その結果、彼らは受動的な支援の受け手となり、それが人々から自主決定の力や主体性を奪い取るだけでなく、支援の与え手に対する権利の要求を慎み、恩義を受けることの謙虚さを示すことを強要されるのである [Wilson & Brown 2009: 7-8; Fassin 2012: 3-4]。

また、無償の贈与の与え手は、受け手に犠牲者としてのストーリーを語らせ、感謝を強要することもあり、人道的支援の受け手を恥ずかしめ、彼らの間に慈善家に対する憤りや



敵対心が生まれることも報告されている。とりわけ、他者の人道的活動を引き起こすためには、他者の「共感の動員」を可能にする当事者による苦悩のイメージや語りが必要であり、そこでは犠牲者の潔白性を強調する内容の方が好まれる [Wilson & Brown 2009: 18-20]。そのため、人道主義プログラムの下で、救済の対象となる子供たちは、無垢で脆弱な存在として描写され [Suski 2009]、難民申請者の間では、国連難民高等弁務官事務所の職員が西洋先進諸国への再定住の必要性を判断するために要求する「犠牲者」としての苦悩の基準を満たすための語りが生み出される [Sandvik 2009]。また「犠牲者」による語り自体が政治的あるいは宗教的目的のために流用され、間違った形で表象されるおそれもある [Jelin 2009]。

以上の議論を踏まえ、本稿では人道主義とは、人間愛に基づき、他の人間に向けられる情緒的な働きかけを意味しながらも、慈悲を与える人々と与えられる人々の間に存在する不平等性により、前者は後者に保護や安心感を与えると同時に、恐れや不安などももたらし得るという二面性を有するものとして定義する。

このように難民を支援する側の人道主義が内包する暴力性が議論される一方で、支援を提供される難民に焦点を当てた人類学的研究では、難民を紛争の犠牲者或いは国際社会からの支援を待つ受動的な存在として均質的に捉えることの問題が指摘されてきた。たとえば Liisa Malkki は、従来の難民研究において、難民がトラウマなどの精神疾患を抱えていることや、故郷の喪失は文化やアイデンティティの喪失をもたらすことを前提に、人々がいくつかの共通のプロセスを経て、最終的に新たな環境への文化適応 (adaptation) や文化変容 (acculturation) の段階に至ると無批判に考えられてきたと述べる。そして、すべての難民が共通の状態や性質を共有しているとみなし、人々の多様な経験を「難民の経験」として本質化することに警鐘を鳴らした [Malkki 1995: 508-512]。

他方で久保忠行は、難民の能動性や主体性に焦点を当てた従来の人類学的難民研究において、脆弱性と主体性が二項対立的に位置づけられてきたことを批判する。久保によると、難民とは、国民、国家、支援者との関係の中で立ち現れる存在であり、とりわけ、国連機関や国際 NGO などの難民への国際的な支援・保護体制が支援対象者としての難民をつくり上げたため、支援対象者としての難民が帯びる脆弱性には構築的な側面がみられる。それにもかかわらず、脆弱な状態にある中での難民の能動的、主体的な営為に着目した研究では、難民の脆弱性が当該の人々自身のもつ所与の属性として想定され、主体性に対置されることで、このような脆弱性の構築的な側面が隠蔽されてきたと批判する。そして、このようにつくられた難民の性質を表す「難民性」という概念を、国際的な支援・保護体制が構築する被支援者＝難民という意味での難民性（難民性1）とそれに応答する人々の実践という側面での難民性（難民性2）に分け、双方を検討することの必要性を提示した [久保 2010: 151-153]。

以上から、難民性とは、難民を取り巻く国際的な支援機関や難民の国家への包摂や排除の境界を定める権力を有する国家の政治家や専門家によって形づくられたものという側面と、難民の生活経験にみられる構築された難民の属性への難民自身の対応という両

側面から成るものと捉えることができる。このような視点に立ち、本稿ではオーストラリア主流社会によって構築された難民性と、それへのアフリカ人難民の応答を明らかにする。

なお、外部によって構築された脆弱性に基づく難民性への対応を考察するにあたり、難民のレジリエンス (resilience) という視点が必要である。レジリエンスとは、心理学において一般に、逆境や困難、強いストレスに直面したときに、回復する精神力 (しなやかさ) のことを指すが、トラウマを経験した難民女性のアイデンティティを研究した Maroussia Hajdukowski-Ahmed によると、レジリエンスとは、逆境に立ち向かう個人の内在的な能力だけでなく、個人を取り巻く社会的なアクターや環境的要因との対話的な相互作用から生まれるものであり、レジリエンスを誘導する要因は、関係的かつ多元的で文脈依存的である。さらに、レジリエンスは言語によってだけでなく、非言語や沈黙を通してさえも表現することができる [Hajdukowski-Ahmed 2012: 211-212]。本稿においてレジリエンスは、このように難民と彼らを取り囲む外部の人々との関わりの中で形成されるものとして捉える。なお、本稿で用いる「他者化」という言葉は、自分が属している集団内部の人々を、異なる個性を持った一人一人と見るのに対し、自分が属さない集団の人々を同質のものとして一括りにする見方や行為を意味する。そのため、「難民の他者化」とは、主流社会の人々が自分とは異なる集団に属する難民を同質的な存在として一括りにみなす態度や行為のことを指す。

## 2-2 オーストラリアの難民に関する研究

先述のように、人類学では多様な難民の経験を本質化して捉えることの問題点が指摘されてきた。しかし一方で、オーストラリアにおける難民研究の多くは、難民が共通のプロセスを経て最終的に国家へと再統合されることを前提とし、人々が主流社会への「社会統合」のプロセスで直面する問題の要因を分析した。とりわけ、アフリカ人難民の多くが、教育、雇用、住宅などあらゆる面で不利な状況に置かれていることについて、その背景には、身体的特徴、訛りのある英語、服装をはじめとする彼らの可視性に基づく主流社会における差別や偏見、そして主流社会の人々がアフリカ人全般に対して抱く「未開人」としてのステレオタイプがあることが指摘された [Poppitt & Frey 2007; Brown, Miller & Mitchell 2006; Colic-Peisker 2009]。

しかし、これらの先行研究が前提とする「社会統合」という概念は曖昧さを孕み、何をもって「社会統合」とするのか、誰が「社会統合」が達成されたと判断するのかについては明確な基準は示されていない。移民の異文化適応に関する研究において「社会統合」とは、心理学者の John Berry による定義に従うと、移民が独自の文化を維持しながら、主流社会の人々とも接触し、市民社会へより広く参加することを指す。一方で、「社会統合」が具体的に意味するところは地域やそれを唱える人によって異なり、場合によっては、移民に独自の文化を放棄し、主流社会の文化や価値観を受け入れることを強要する「同化」と同義に用いられる場合があることも明らかにされている [Lino Lejukole 2008: 23-24; Marlowe 2013: 101-102; Fozdar 2012: 49]。

たとえば、Farida Fozdar は、難民の社会統合とは本来、難民と主流社会双方の努力によって達成されるプロセスであるにもかかわらず、現実には難民が主流社会における文化や価値観を習得し、支援提供者へ感謝することを前提に行われるという意味で同化主義的であると述べる。さらに、主流社会の価値観や行動様式に従う難民のみが受容されることにより、結果として、既存の伝統的価値観が強化されることになる」と主張する [Fozdar 2012]。また、文化的多様性の受容をめぐる主流社会側の問題として、Ghassan Hage は、白人がエスニック集団の文化的価値を評価するオーストラリアの多文化主義において、多様性の受容は常に限定的で、白人の善意に依拠するものであり、そこでは白人とその価値観は変化を要請されることはない」と指摘している [Hage 1998]。

さらに、自ら難民として渡豪し、アデレードに居住する南スーダン人の生活経験に関する人類学的調査を行った James Lino Lejukole は、当事者の視点から「社会統合」について考察を行った。Lino Lejukole は、南スーダン人の主流社会への「社会統合」において難民支援組織や教会が果たした役割の重要性を指摘しながらも、彼らの多くは、独自の文化を維持しながらの「社会統合」を望んでいるにもかかわらず、難民への十分な相談もなく再定住や社会統合に関する政策やプログラムが作成されたため、難民の声が取りこぼされてきたと主張する [Lino Lejukole 2008: 191-197]。しかしながら、Lino Lejukole の研究においても、「社会統合」の内実是不明瞭なままであり、この概念の曖昧さの問題は依然として解決されていない。そこで以下では、オーストラリア社会におけるアフリカ人難民の位置づけや受けとめられ方を踏まえた上で、主流社会が期待する「社会統合」の内実とそれへの難民側の応答について明らかにしていく。

### 3 オーストラリアにおけるアフリカ人難民の位置づけ

国連による 1951 年の難民の地位に関する条約への加盟国であるオーストラリアは、2000 年以降、人道支援プログラムの下でスーダン、リベリア、ブルンジ等のアフリカ諸国から大量の難民を優先的に受け入れてきた。とりわけ、スーダンは、2002 年から 2007 年にかけてオーストラリアの人道支援プログラムの下で受け入れられた難民の出身国の第 1 位を占め、ブルンジは、2004 年から 2007 年にかけて 5 位または 6 位であった（表 1 を参照）。

表1 オーストラリアの人道的プログラムの下で受け入れられた難民の出身国の順  
(Australian Government, Department of Immigration and Citizenship 2012 より作成)

| 順位 | 2001-02 年 | 2002-03 年 | 2003-04 年 | 2004-05 年 | 2005-06 年 | 2006-07 年 |
|----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1  | 旧ユーゴ      | スーダン      | スーダン      | スーダン      | スーダン      | スーダン      |
| 2  | スーダン      | イラク       | イラク       | イラク       | イラク       | ビルマ       |
| 3  | イラク       | アフガニスタン   | インドネシア    | アフガニスタン   | アフガニスタン   | イラク       |
| 4  | アフガニスタン   | 旧ユーゴ      | アフガニスタン   | リベリア      | ビルマ       | アフガニスタン   |
| 5  | クロアチア     | エチオピア     | エチオピア     | シエラレオネ    | リベリア      | ブルンジ      |
| 6  | エチオピア     | イラン       | イラン       | ブルンジ      | ブルンジ      | コンゴ       |
|    |           |           |           |           |           |           |
| 順位 | 2007-08 年 | 2008-09 年 | 2009-10 年 | 2010-11 年 | 2011-12 年 |           |
| 1  | ビルマ       | イラク       | ビルマ       | イラク       | ビルマ       |           |
| 2  | イラク       | ビルマ       | イラク       | ビルマ       | イラク       |           |
| 3  | アフガニスタン   | アフガニスタン   | ブータン      | アフガニスタン   | アフガニスタン   |           |
| 4  | スーダン      | ブータン      | アフガニスタン   | ブータン      | ブータン      |           |
| 5  | リベリア      | スーダン      | コンゴ       | コンゴ       | エチオピア     |           |
| 6  | コンゴ       | エチオピア     | エチオピア     | エチオピア     | コンゴ       |           |

スーダンは、主にアラブ系イスラム教徒から成る北部とサブサハラ系キリスト教徒が多数派を占める南部から成るが、1956年の植民地からの独立以来、北部出身者が政治の実権を握ってきた。北部出身者は自身を南部出身者より人種的、宗教的、文化的に優位であると考え、それを根拠に南部出身者を抑圧してきたことが、北部と南部の間に2回にわたる内戦をもたらす要因となった [Jok 2001; 栗本 2004]。1955年から1972年に及ぶ1回目の内戦では約18万人、1983年に勃発した2回目の内戦では、何万人もの南部出身者が強制移住させられ、彼らは後に、エチオピアやケニアの難民キャンプへの避難、あるいはエジプトなどの近隣のアフリカ諸国への亡命という選択を迫られた。そして、アフリカ諸国への避難民の一部は、オーストラリアをはじめとする1951年の難民の地位に関する条約への加盟国への定住の機会を与えられることになったのである。2011年の時点でオーストラリアに定住するスーダン人は約22,000人であり、そのうち南オーストラリア州には約2,000人のスーダン人が居住していた<sup>2</sup> [Marlowe, Harris and Lyons 2013: 4-5; Lino Lejukole 2013: 116; Australian Bureau of Statistics 2018]。

他方、ブルンジはツチ、フツ、トゥワ（「ピグミー」）から成る国であったが、20世紀

2 2011年の国勢調査によると、スーダン難民はオーストラリアの全州に居住しているが、その割合が相対的に高い州として、ビクトリア州(6,085人)、ニューサウスウェールズ州(5,629人)、西オーストラリア州(2,722人)、クィーンズランド州(2,582人)が挙げられる [Department of Immigration and Citizenship 2014]。



初頭にドイツとベルギーによる植民地支配を受け、ツチとフツ間での分断が生じたことが後の内戦の要因となった。ブルンジは1962年に植民地からの独立を果たし、ブルンジからルワンダが分離したが、1972年、1993年に両集団間での大量虐殺が起こり、避難民の多くはコンゴやルワンダを経由して、タンザニアの難民キャンプへの避難を余儀なくされた。そして、スーダン人と同様に、避難民の一部がアメリカ合衆国やオーストラリアをはじめとする先進諸国への定住の機会を与えられている。2006年以降、ブルンジでは国家の再建が始まり、帰還する難民も見られるが、依然として治安が安定しないため、避難先の国に残ることを選択する人々もいる。2011年の時点でオーストラリアに定住するブルンジ人は約1,900人であり、そのうち南オーストラリア州には約700人のブルンジ人が居住していた [Australian Bureau of Statistics 2018; Government of South Australia 2014: 1]。

なお、南スーダン人の大半は、イギリス人の入植以前には土着の宗教を信仰していたが、そのうちの大部分が内戦前後にキリスト教に改宗した。Lino Lejukoleによると、キリスト教は南スーダン人が難民としての生活を送る上で重要な役割を果たし、他国の難民キャンプや西洋先進国に居住する中で、国連や政府からの生活支援を得られない場合は、教会から様々な支援を受けていた。特に、エジプトの難民キャンプでは、政府から正式な難民として認められない限り、国連から提供される食糧や医療サービスが制限される中で、教会が南スーダン人に、食料の配給、基本的な教育、医療サービスを提供していた [Lino Lejukole 2008: 104]。また、ブルンジ人に関してもその人口の約8割がキリスト教徒で占められている [Government of South Australia: 2]。

先行研究が指摘する通り、アフリカ人難民の多くはオーストラリアへの受入れが始まって以来、雇用、住宅などあらゆる面で不利な立場に置かれてきたが、この状況は彼らの多くがオーストラリアの市民権を獲得した現在でも大きく変化していない<sup>3</sup>。とりわけ雇用に関しては、2013年の時点で、南オーストラリア州におけるアフリカ系出自の人々のうち、スーダンをはじめとする北アフリカ出身者の失業率は約16パーセントであり、州全体の7.1パーセントを大幅に上回っていた [SALT African Australian News Magazine 2013]。

その結果、アフリカ人難民の多くは、意に反して社会福祉サービスに依存するか、あるいは就学もしくは未熟練労働に従事するかを選択を迫られる。ここで重要なのは、渡豪後に大学等の高等教育機関で学位を取得した場合でも、資格や能力に見合わない職に就かざるを得ないこと、さらに主流社会では、彼らが人道主義プログラムの下でオーストラリア政府に救済された難民であるがゆえに、そのような状況を受け入れるのが当然だとみなされていることである [Colic-Peisker 2009: 80]。

たとえば、2010年に難民としてオーストラリアへ移住したスーダン人女性は、アデレードの大学で商学の学士号を取得した後も就職先が見つからず、現在は福祉給付金で生活している。この女性は、会計士の仕事を探しているが、オーストラリアでは家族経営の会

3 アフリカ人難民は、渡豪して2年が経つと、オーストラリアの歴史、文化、価値観についての知識を問う市民権テストを受け、それに合格すれば、自動的に市民権を与えられることになっている。

社が大半であり、白人とのコネクションがないために就職が困難であると語ってくれた（2015年9月16日の聞き取り調査より）。このような就職の困難さを反映し、アデレードにおけるスーダン人の1週間当たりの平均的な個人所得は、1ドルから199ドル、200から299ドルの層が最も多く、全体の約30%を占めていた。オーストラリア人の場合、400ドルから599ドル、600ドルから799ドルの層が約20パーセントを占めていることから、かなり低いことがわかる [Australian Bureau of Statistics 2011]。

就職の際には、資格やオーストラリアでの就労経験のみならず、オーストラリアの文化的知識を身に付けているかといった「ソフトな技術 (soft skills)」<sup>4</sup>が重視されるなど、「文化」的差異を理由とした構造的な差別が根底にあるといわれている [Colic-Peisker 2009: 81]。それにもかかわらず、主流社会においてアフリカ人難民の失業率の高さは、難民自身の努力不足の問題として認識されることが多く、それがアフリカ諸国からの難民の受け入れ政策にも影響を及ぼすことになった。2007年に、ケビン・アンドリュース移民大臣（当時）は、アフリカ人難民、とりわけスーダン難民は、他地域からの難民と比較して教育レベルが著しく低いことや、長年にわたる難民キャンプでの生活のため、オーストラリアへの社会統合が困難であるという理由から、人道的プログラムにおけるアフリカ人難民の受け入れ人数の削減を発表したのである<sup>5</sup>。そのため、2007年以来、オーストラリアにおけるアフリカ人難民の受け入れ人数は減少傾向にある。

アデレードのアフリカ人難民の間では、このようなオーストラリア主流社会で自分たちが直面する様々な問題に対応しながら、社会統合を支援するための自助組織が形成されている。たとえば、現在アデレードには、南スーダン人によって設立された公式・非公式のエスニック・コミュニティ協会が約14存在する。エスニック・コミュニティのメンバーの間では、生活に困っているメンバーへの支援や、会議、医療、葬式等に必要な費用の寄付等の日常的な相互扶助に加え、現在でも難民キャンプや南スーダンに残留するメンバーの親族への支援も行われている [Lino Lejukole 2008: 163-165]。

中でも、南オーストラリア州南スーダン人コミュニティ協会では、新たにアデレードに移住した南スーダン人と主流社会の難民支援組織の仲介を行うなど、人々の地域社会への適応を手助けするための支援が行われてきた。同協会は、南スーダンの独立記念日やクリスマスにパーティーを催すなど、同胞者が交流する機会を提供すると同時に、コミュニティ内での問題について話し合いの場を設けている。また、同協会のリーダーは、コミュニティ内の家族レベルや個人レベルで問題が生じた場合の仲裁に加え、コミュニティの若者が酒や薬物の乱用などにより警察との間で問題を起こした際の仲介といった役割も担ってきた。特に、このリーダーは、同協会が警察との間に良好な関係を築いているとし、そのことについて次のように説明した。

4 自由、平等、民主主義といったリベラルな価値観に加え、職場の休憩室でのユーモアのセンスや白人にとっての常識的な態度や振る舞い方が含まれる。

5 *The Advertiser*, 2 October 2007, 'Andrews slams door on African humanitarian refugees'

私たちは警察と共に活動しています。私たちは警察に協力します。毎月彼らとミーティングをして、コミュニティの問題について話し合いをします。問題があつて、警察が心配しているときには、緊急ミーティングをすることもあります。警察は私に電話で、現場に来て支援するように求めています。

そして警察との間に問題を抱える若者の処遇について以下のように語ってくれた。

まずは私たちで問題を解決しようします。もし問題が解決できなければ、彼らを南スーダンに返します。特に若者に数ヵ月間故郷に戻ってもらい、自分たちで分らせるのです。彼らはここではより良い生活を送っています。というのも母親がいて、お金があつて、車があるので、自分が何をやっているか考えたりしないのです。もしアフリカに行けば、そこで苦難を経験することになります。そうすることで更生することができるでしょう。そして自分が誰で、どこから来たのかを知ることができるでしょう。今自分がいる場所に感謝するでしょう（40代男性、2014年9月5日の聞き取り調査より）。

このように、この協会のリーダーは、警察に対する過度に従順ともいえる態度を示すことで、南スーダン人が地域社会に「適応」していることを主流社会の人々に訴えようとしていることが窺える。

また、ブルンジ人に関しても、エスニック・コミュニティ協会が彼らの社会適応において重要な役割を果たしている。たとえば、南オーストラリア・ブルンジ・コミュニティ協会は、2005年に州政府やNGOの支援を得て設立された。同協会はこれまで、ブルンジ人の社会統合を支援することを目的とし、とりわけ家庭内暴力、酒や薬物の乱用、自殺の防止に向けたプロジェクトや活動を実施してきた。また、同協会では、ブルンジの男性によるドラム演奏グループや、女性ダンスグループ、サッカークラブ、聖歌隊などの複数の文化集団が形成されるなど、ブルンジの文化の維持にも力が入れている（The Association of Burundian Community of South Australia Inc）。

013

#### 4 主流社会におけるアフリカ人難民の表象

オーストラリア主流社会でアフリカ人難民がいかに受容され認識されてきたのかは、メディア等における彼らの描写から窺い知ることができるが、主流社会におけるアフリカ人難民の表象の仕方をめぐってはこれまで様々な問題が指摘されてきた。とりわけスーダン難民が、メディアや学術書において、トラウマを経験し、精神的ダメージを受けた他者として描写され、受動的な犠牲者として本質化されることが、オーストラリア社会におけるスーダン人の従属的な地位の強化につながるおそれがあることが懸念されてきた〔Marlowe 2010〕。

このような問題点を踏まえ、以下では、オーストラリアの人道支援団体や政府機関が刊

行した報告書やメディアを通して流布されるアフリカ人難民のイメージをもとに、主流社会において難民性が構築されるプロセスについて分析する。アフリカ人難民の渡豪が始まって以来、彼らは主流社会において一般的に、脆弱性と暴力性の双方のイメージと結びつけられる傾向があった。たとえば、オーストラリアの任意団体であるオーストラリア子供基金が、難民の生徒と関わる教職員を対象に作成した、「戦争と再定住におけるトラウマ難民の生徒のニーズに応える」と題されたディスカッションペーパーでは、トラウマを抱えた難民の子供像が浮き彫りにされている。

ディスカッションペーパーではまず、難民の子供や若者がオーストラリアの学校へ入学する際に、多くのトラウマの経験を抱えているとし、彼らが晒されている4種類のトラウマ（①心的トラウマ、②身体的トラウマ、③移住に伴うトラウマ、④再定住に伴うトラウマ）についてそれぞれ説明がなされた。①は、戦闘地域で生活する子供たちや、これまで暴力に関与してきた若者は暴力を信奉していること、②について、難民キャンプで育てられた子供たちは、身体的危険、食糧や水へのアクセスの制限、親からの隔離、高度の暴力、薬物乱用などの危険に晒されてきたことが言及された。③に関しては、難民の子供たちはオーストラリアの移民拘留所でも数々の人権侵害に晒され、トラウマを経験していること、④については、難民としての地位が認められた後も、大人は高い失業率に苦しみ、深刻な困難を抱えるとされた。

次に、このような過酷な経験が難民の子供たちの成長に与える影響について、子供たちが苦難の状況を生き抜くために発展させた行動様式として、暴力的な場面の演出、攻撃性、過度な用心深さ、内気さあるいは無反応が挙げられた。その上で、教職員はこれらの子供たちを「病气」ではなく「傷ついている」とみなす必要があること、そして、攻撃的な行動、過度な注意深さや内気さは、子供たちが自身で容易にコントロールできない外部の刺激によって引き起こされているため、子供たちと同調し、つながりを築くことで、その行動の背後にある意味を探ることの重要性が勧告されている[Australian Childhood Foundation 2011]。ここでは、難民が置かれた脆弱な立場ゆえに、子供たちが暴力性や攻撃性を身に付けていったという解釈がなされ、脆弱性と暴力性が表裏一体であるというイメージが形成されていることがわかる。

トラウマを抱えた脆弱な犠牲者としての難民像は、メディアにおいて特にスーダン難民に当てはめられた。たとえば、スーダン難民の受け入れが始まって間もない2003年のアデレードの地方紙、「アドバタイザー(The Advertiser)」では、以下のようなスーダン難民の苦難の経験が紹介された。

彼らの笑顔からは、彼らが耐えてきたトラウマ、暴力、苦悩を窺い知ることはできない。

ドミニック・ダウン・デング氏は、戦争で荒廃した母国の混乱と破壊から逃れなければならなかった。(中略) 悲しいことに、彼らのストーリーは特別ではない。過去1年の間に約700人のスーダン人がここに到着したが、彼らはイスラム系政府の残忍な支配を逃れるために母国を離れることを余儀なくされた。



ダウン・デング氏は15年間スーダン人解放軍にいたが、イスラム教への改宗を拒んだ際に残忍な方法で殴られた。「私は政府の治安部隊に殴られ、父は拷問されて殺されました。母と6人の兄弟も亡くなりました」とキャンベルタウン在住の43歳のダウン・デング氏は語った。(中略)しかし、家族の悩みは尽きない。

アウェイル(Aweil)という私の町で夜に発砲が起こったとき、大量の人々が町から脱出しました。私の家族も町から逃れ、エチオピア、そして次にケニアの難民キャンプに落ち着きました。混乱の中で、家族が離れ離れになり、私たちは子供のうちの4人を失いました。

と彼は語った。

彼はナイロビの難民キャンプで1人の息子と娘を見つけ出したが、残り2人の息子の行方は分かっていない<sup>6</sup>。

このようにオーストラリアでアフリカ人難民の受け入れが始まってしばらくの間、難民救済の眼差しから、メディアではアフリカ人難民をめぐる脆弱性のイメージが強調された。しかし、時間の経過とともに、アフリカ人難民の描写のされ方に変化が生じ、彼らは容易に暴力や犯罪と結び付けられるようになった。その契機の一つとして、2005年のマッコーリー大学法学部教授による「黒人」と犯罪とを結びつける発言が挙げられる。同教授は、「黒人」であることは知能指数の低さを含意し、それが犯罪率の高さをもたらす要因であるとした上で、オーストラリアに新たにやって来た「黒人」、特にスーダン人コミュニティは犯罪集団に他ならないと述べ、連邦政府にスーダン難民の受け入れの廃止を要求したのである [Dau 2015: 82-83]。また、アフリカ人難民の表象の変化をもたらしたもう一つの出来事は、2007年にメルボルンで起こった19歳のスーダン難民の少年の殺害事件である。この事件の犯人は、殺害された少年と交友関係のあった白人の少年であったにもかかわらず、当初は警察によってスーダン難民のギャングによる事件と推定された [Victorian Equal Opportunity & Human Rights Commission 2008]。そして、この事件の直後に、先述の移民大臣によるアフリカ人難民の受け入れ人数の削減が発表されたのである。

これらの出来事の後、メディアではスーダン難民が置かれた境遇の過酷さや異常さが強調される一方で、社会の秩序を脅かす存在としての彼らのイメージが流布されるようになった。とりわけ、オーストラリアにおけるスーダン人人口率が最も高いビクトリア州メルボルンの地方紙や全国紙では、2010年頃から主にスーダン人の若者から成るストリートギャング「エイペックス・ギャング (Apex Gang)」による犯罪が頻繁に取り上げられてきた。「エイペックス・ギャング」は、車の乗っ取りや強盗に関与する構造化された犯罪組織として報じられ、主にメルボルン北部郊外で生まれ育ち、学校を中途退学した無職の

---

6 *The Advertiser* 4 September 2003, 'So safe - a world away from horrors of their homeland'

スーダン人の若者集団によって形成され、後に太平洋島嶼民やアングロ系白人もメンバーに加わったと報じられた<sup>7</sup>。それにもかかわらず、主流社会でこの集団はスーダン人のギャング集団として認識されたのである。

これらの記事では、スーダン人の若者の残忍性や暴力性の原因が、しばしば母国や難民キャンプでの苦難やトラウマの経験と結び付けて説明された。たとえば、メルボルン南部の路上で生じたスーダン難民と太平洋諸島民の間の衝突に関する記事では、「スーダン難民の若者はギャング・メンタリティを持ち、それが他の移民集団との間に醜い衝突をもたらしている」とされ、スーダン人の少年らは内戦が続く故郷で兵士を崇拜し、暴力を受容するように育てられたことが、犯罪や路上での喧嘩を引き起こす原因となっていると説明されたのである<sup>8</sup>。

アデレードでも 2008 年 11 月に市街地中心部でナイフを持ったスーダン人の若者グループが暴力事件を起こし、14 歳のスーダン人の少年が殺害されたのを機に、スーダン人コミュニティ全体に対する恐れを掻き立てる記事が掲載されるようになる。メルボルンの記事と同様に、スーダン人の若者はギャングとして一括され、恐怖心をもたず、武器を携帯して放浪する近寄りたがいない存在として描写されることもあった。そしてスーダン人の若者にみられる「反社会性」は、やはり彼らが戦闘地域で生まれ育ったという難民としての特異な経験に起因するものであると解釈されたのである<sup>9</sup>。ここでも、難民が孕む暴力性が、彼らが母国で置かれていた脆弱な立場ゆえに生じたものとみなされ、脆弱性と暴力性という二つの側面が不可分な関係として認識されているといえる。

アドバタイザー紙では、スーダン人による暴力事件や犯罪が頻繁に取り上げられる中で、アデレードで問題を起こすスーダン人の強制送還を望む以下のような地元住民の声が掲載されることもあった。

スーダン人の容疑者が有罪判決を受けたなら、彼らを母国へと帰すべきです。彼らはここに大人しく落ち着く気はないのですから（地元住民）<sup>10</sup>。

スーダン人の暴力はスーダンで起こるべきで、アデレードの通りで起こるべきではありません。何の罪もないオーストラリア人がこの争いに巻き込まれる前に彼らを強制送還すべきです（地元住民）<sup>11</sup>。

しかし一方で同紙では、以下のように、スーダン難民が置かれた状況に対して同情を示し、彼らを擁護・支援しようとする教会関係者や地元住民の見解も紹介された。

7 *The Age* 15 March 2016, 'Where the growing Apex gang gets its inspiration'

8 *The Australian* 28 September 2017, 'Sudanese migrants 'fighting islanders''

9 *The Advertiser* 14 November 2008, 'Culture SHOCK'

10 *The Advertiser* 6 October 2010, News Opinion 'Send them home'

11 *The Advertiser* 9 October 2010, News Opinion 'Not our fight'

過去5年間、私は幸運にも多くのスーダン人やその他のアフリカ出身の移民と知り合い、友人になりました。問題を抱えていない社会などありませんが、私が関わったこれらの人々は全体的に、私がこれまで出会った中で最高の人々であり、彼らを友人と呼べることを誇りに思います（ルーテル教会牧師）<sup>12</sup>。

さらに、先述の通り、2007年に当時の移民大臣によって人道的プログラムにおけるアフリカ人難民の受け入れ人数の削減が発表されたのを機に<sup>13</sup>、この取り決めに批判する以下のような人々の声が掲載されるようになった。

アンドリュー氏は自分の政治的利益のために、スーダン人を選び出し、同化の遅さを批判しましたが、それは不親切です。スーダンでは20年間にわたって戦争状態にあります。これらの難民は想像を絶する経験をしてきました。多くの人々は普通の(normal)社会または安全について知らないのです。外国への再適応に時間がかかるのであれば、それは彼らのせいではありません（地元住民）<sup>14</sup>。

ニュースでは、「多くのアフリカ人難民が地域社会へと適応しないため」、オーストラリアへのスーダン難民の受け入れ人数を大幅に削減されることが報道されました。確かに、[適応に]「失敗した人々」もいます。でも成功した人も多くいます。多くのスーダン人は一生懸命に働き、勉強し、オーストラリア社会を豊かにしています。同時に、多くの難民は不可解な制度の中で途方に暮れています（南オーストラリアキリスト教会協議会、世界教会(ecumenical)スーダン支援団体代表）<sup>15</sup>。

ここで留意すべき点は、スーダン難民を擁護する見解においても、それは「「想像を絶する」経験をした難民としての苦難を考慮すれば」というように難民の脆弱性を想定し、あくまでもトラウマを受けた犠牲者としての難民像が前提とされている。そこには、スーダン難民が「正常性」から逸脱した存在として他者化され、秩序を重んじる白人とは本質的に異なる集団として認識されていることが窺える。

アドバタイザー紙ではさらに教会やコミュニティ・グループがトラウマや拷問の生存者の支援、オーストラリアの文化の教授、就職や運転免許取得の援助など、アフリカ人難民のオーストラリア社会への適応を支援する様々なプログラムやサービスを提供していることが頻繁に報じられ、その度に白人からの支援に謝意を示し、その返礼として、オーストラリア社会への貢献を目指す以下のようなスーダン難民の声も同時に紹介された<sup>16</sup>。

12 *The Advertiser* 15 November 2008, News Opinion 'Excellent friends'

13 *The Advertiser* 2 October 2007 'Andrews slams door on African humanitarian refugees'

14 *The Advertiser* 5 October 2007 'Don't blame Sudanese'

15 *The Advertiser* 26 February 2007 'Support shouldn't end with migration'

16 *The Advertiser* 22 January 2007, 'Helping refugees achieve goals'; *The Advertiser* 29 December 2008, 'YOUNGER South Australians are heralding a stronger multicultural society through a Sudanese integration partnership program'; *The Advertiser* 9 June 2008, 'Cash to help refugees embrace a better life'

〔手頃な民間の賃貸住宅を探すのを手伝ってくれたリエゾンオフィサーに対して〕私は妊娠していて、車もなく、英語もうまく話せず、どうしようもない状況でした。ケリー〔リエゾンオフィサー〕はとても親切にしてくれ、彼女がいなければ、家を見つけることはできなかったでしょう<sup>17</sup>。

私はオーストラリア市民となって仕事を見つけないです。工場でも、肉体労働でも、カウンスルの仕事でもどんな仕事でもします。ここでの生活は完全に異なります。白人は世界で最も親切な人だと思います<sup>18</sup>。

上記の記事以外にも、大学進学や就職を通してオーストラリア社会で成功を収めるスーダン人や、内戦や難民キャンプでの様々な苦難やトラウマを経験しながらも、オーストラリア社会で新たな生活を始めるために努力するスーダン人の事例が取り上げられた。たとえば、ある記事では、スーダン人コミュニティで集めた35,000ドルを、南スーダンにおける診療所建設のための資金集めを行う牧師らに寄付したスーダン難民が取り上げられ、「人々は難民や亡命者に対し批判的になりやすく、彼らがオーストラリア社会の負担になると言うが、実際のところ、難民や亡命者の多くは毎日私たちに彼らが寛大さというオーストラリアの精神を受容したことを示している」という牧師の声が紹介された<sup>19</sup>。また、別の記事では、スーダン難民が南オーストラリア州の地方町におけるアフリカ人と先住民の緊張緩和のために、自警団の活動に協力していることが報じられ、彼の協力により警察とスーダン人の連携が容易になったとして賞賛されている<sup>20</sup>。

ここでは、苦難やトラウマを経験しながらも、自分たちを支援してくれるオーストラリア人に謝意を示し、何らかの形で返礼しようとする難民の姿が強調された。このようなスーダン難民の姿は、支援の見返りとして感謝や社会への貢献を期待する多数派の市民にとって心地よいものであるといえる。以上から、主流社会で構築された難民性には一定の図式が見られる。すなわち、難民は、脆弱な人々として描写された場合でも、社会の秩序を乱す暴力的な人々とみなされた場合でも、白人にとって「想像を絶する」経験をした異常な存在として、そして「正常な」白人の世界とは断絶した世界の人々であるというイメージのもとで他者化されているということである。さらに、難民をめぐる脆弱性と暴力性は連続したものでありながらも、主流社会では脆弱な難民像の方が肯定的に受容され、難民は白人からの支援を享受し、それに謝意を示し、返礼すべきであるという難民をめぐる理想像が構築されているといえる。

17 *The Advertiser* 14 October 2006, 'Home safe and rebuilding a life'

18 *The Advertiser* 4 September 2003, 'So safe - a world away from horrors of their homeland'

19 *The Advertiser* 23 June 2014, 'Sudanese celebrate by giving back'

20 *The Advertiser* 7 January 2012, 'Refugee bridges racial gap Neighbourly way to unity'



## 5 教会によるアフリカ人難民への支援とそれへの対応

主流社会のメディアを中心に構築された難民性は、現実の社会におけるアフリカ人難民への支援の場でどのように立ち現れているのだろうか。以下では、オーストラリアがアフリカ人難民を受け入れて間もない頃から、アフリカ人難民に対し宗教面および生活面での支援を行ってきた2つの教会（英国国教会）を事例に、支援を提供する側の白人の教会関係者と支援を受ける側のアフリカ人難民の関係に注目しながら難民性が構築される過程とそれへの難民側の応答について考察する。なお、ここで教会の事例を取り上げるのは、教会に関与する白人の多くが、難民の置かれた状況に対し同情的な態度をとり、難民の「社会統合」の問題に対して高い意識を持ちながらも、主流社会のメディアを中心に構築された難民性を強く抱いていたためである。

### 5-1 事例1：S教会（英国国教会）

アデレード北東部郊外に位置するS教会では、約10年前から近隣の地域に居住し始めたスーダン人に礼拝の場を提供してきた。当初礼拝は、白人とスーダン人が日曜の午前と午後に分かれて別々に行われ、両者の間に直接の接点はなかった。しかしある時、スーダン人の牧師が白人のメンバーに、内戦で母国に残された親族の子供（孤児）をオーストラリアへ連れてくるための支援を求めたのを契機に、白人メンバーによる支援が始まった。白人メンバーらはスーダン人と共に、孤児のビザ申請をめぐって弁護士による法律サービス委員会に同行し、教会全体でDNA検査のための資金集めを行った。

しかし、証拠不十分で申請が拒否されると、彼らは知り合いの地元の議員に支援を要請し、嘆願書を作成した。そして3年のプロセスを経てようやくビザ申請の許可が下り、無事に孤児の渡豪が実現したのである。それと並行して、この教会では、スーダン人が自立して礼拝サービスを提供できるようにするための資金援助や、安価な日用品の提供なども行ってきた。現在この教会では、日曜の午前中に白人とスーダン人の合同礼拝が、午後にスーダン人のみの礼拝が行われている。

筆者が礼拝に参加した日（2018年3月18日）、午前中の合同礼拝では約40名の参加者のうち、数名のスーダン人とアジア系移民を除き大半が白人で占められていた。礼拝は定刻通りに厳粛に行われ、牧師の説教では、キリスト教徒であることは、権力や権力者に抵抗することであるとし、黒人の公民権運動、女性解放運動、先住民との和解にキリスト教が果たした役割の重要性について言及された。また、牧師は「私たちはこれまで隣人のことを自分のことのように愛してこなかった」とし、そのことを改めなければならないとも述べた。礼拝が終わると、参加者はコーヒールームで談笑した後、教会を去った。

午後のスーダン人の礼拝には、正装した子供を含む約50名のスーダン人が参加していた。礼拝はバリ(Bari)語およびアラブ語で行われ、礼拝者はドラムをたたきながら、歌ったり踊ったりして賑やかな雰囲気の中で進行了。スーダン人女性のリーダーによるスピーチでは、「私たちは神様の子供であり、神様は私たちの罪を忘れ、許してくれたが、私たちは他人の罪を覚え続け、許すことができない」とし、「私たちは神様の子供なのだ

から、心を新たにして、他人が犯した罪を忘れ、許さなければならない」という主旨の説教が繰り返され、礼拝は当初予定されていた時間を超えて夕方近くまで続いた。

この教会の白人の牧師（50代女性）は、現在S教会に通うスーダン人の状況について次のように語ってくれた。

南スーダンからやって来る人々はトラウマを抱えていることが多いです。多くの人々は、何年もの間、難民キャンプで過ごしました。彼らがオーストラリアに着いたら、全く別の文化に身を置きます。多くの人々は今ここに20年くらい住んでいて、彼らの多くは職を得ています。彼らは社会構造に非常にうまく適応しています。でも彼らに与えられていないのは、文化的な支援です。この教会は、彼らが集まるスペースを提供しています。そして彼らの言語で、彼らの文化に即したやり方で礼拝ができるようにしています（2017年8月28日の聞き取り調査より）。

しかし、この牧師は、「文化の違い」により教会の白人とスーダン人のメンバーの間では一定の距離が保たれていることを以下のように指摘した。

依然として大きな文化の違いがあります。スーダン人はオーストラリア人とは違うやり方をします。私たちは英国国教会なのでとても堅苦しいですし、全てをきちんとやろうとします。しかし、アフリカ人は自由で解放されているので、礼拝の際に、歌ったり踊ったりして自分たちを表現できるようなスペースを与えています。私たちはたまにがっかりすることがあります。というのも、彼らは私たちの期待に応えてくれなからです。その逆も然りですが。たとえば、私たち〔白人〕のコミュニティの中でスーダン人のサービスに行く人はいません。私たちは彼らが私たちのもとへ来て、歌って踊ってくれることを期待しています。でも私たちも彼らの崇拜へ行行って彼らと時間を過ごそうとはしません。主流社会からの期待は、スーダン人とその他のマイノリティ集団が私たちのやり方に適応することです（2017年8月28日の聞き取り調査より）。

牧師は、教会の白人のメンバーがスーダン人に期待することの具体的な内容について次のように語ってくれた。

行動に関しては、彼らが時間を守ることを期待しています。彼らは仕事に行くときは時間を守ります。時間に遅れると給料をもらえないことを知っています。でも教会では守りません。彼らは教会を文化的な時間で考えています。遅刻しても問題ないと考えています。彼らはお祈りの最初から最後までいるということはありません。彼らは礼拝の時間中に出たり入ったりします。ですので、私たちが合同でお祈りをするときには、出口に近いところに彼らのためのスペースを作っています。こうやって私たちは彼らと協力しているのです。それは彼らが苦勞していることですね。より厳密な時間

枠の中で行動するという事です。その他の期待があるとすれば、私たちが彼らの言うことを理解できるように、熟達した英語（proficient English）を話してほしいということです。それは公平ではないかもしれませんが、それを期待します。スーダン人は、ここに20年いても、とても強い訛りがあります。先週の日曜日、私たちの礼拝でスーダン人の牧師が説教をしましたが、多くの人々が彼の言うことを理解できなかったと不満を漏らしていました（2017年8月28日の聞き取り調査より）。

S教会では、当初、スーダン人の要求に応じる形で白人のメンバーによる献身的な支援が行われてきたが、それはトラウマを受けた脆弱な難民に対して提供された無償の贈与であったといえる。しかし、スーダン人が社会経済的にある程度自立した現在では、白人のメンバーとの関係をめぐって新たな問題が生じていた。白人牧師の語りから、この教会ではスーダン人の文化に適合した礼拝の必要性が認識されながらも、それはあくまでもスーダン人のみの礼拝の場においてであり、白人との合同礼拝では、スーダン人は白人と同様に振る舞うことが要請された。そして教会において白人とスーダン人の空間的・精神的距離が存在する理由を、両者間の「文化の違い」として認識し、スーダン人の側が「文化の違い」を克服することが期待された。

ここで「文化の違い」の具体的内容として挙げられた、時間に対する考え方や英語力の問題は、そのままこの白人牧師が考える難民の「社会統合」の指標として捉えることができ、それを基準にスーダン人の「社会統合」の度合いが測られ、評価されていたといえる。このことから、この牧師が考える「社会統合」とは、スーダン人が独自の文化を維持しながら主流社会の文化へも適応するというタイプのものではなく、スーダン人側の一方的な主流社会への「同化」と同義として捉えることができる。以上から、スーダン人が白人からの支援を必要とする「脆弱な」難民であった場合、支援を提供する白人と支援を受けるスーダン人という関係が成立していたが、スーダン人がある程度自立した市民となった現在では、彼らは単に文化的に異質な存在として他者化され、両者の接点が限られたものとなったことが窺える。

このように白人牧師がスーダン人との「文化の違い」とそれに伴う交流の限界を指摘するのに対し、スーダン人牧師（40代男性）は、S教会においてスーダン人と白人メンバー間の関係がいかに良好であるかについて以下のように語ってくれた。

私たち〔スーダン人と白人〕はいくつかの機会に集まります。イースターの季節には、人々は1つのサービスで一緒にお祈りをします。クリスマスの時期にも、私たちは合同礼拝をします。ですので、イースターホリデーやグッドフライデーには一緒に礼拝をします。そして礼拝の後に一緒にコーヒーを飲んだりします。私たちの人生は教会と深く関わっていて、私たちはあらゆる人種とうまくやっていくことができます。今のところ私たちは週2回しか自分たちだけで祈る機会がありません。それ以外の週は、人々は他の教会に行って、オーストラリア人と共に祈っています。中には、市内中心部のカトリック教会に行く人もいます。人々はオーストラリア人の教会に参

加することを心地よいと感じています。バリ語の礼拝は、英語を理解しない老人のためでもあります。子供たちはバリ語の礼拝に参加して、言語を学ぶこともできます。私たちはS教会と協働することは良いことだと思っています（2018年3月18日の聞き取り調査より）。

この牧師は、「現在、この教会に通うスーダン人の多くが白人と同様に仕事をし、普通に生活している」とした上で、難民としての自分の経験を踏まえながら<sup>21</sup>、スーダン人にとってキリスト教徒であることの意味について次のように語ってくれた。

キリスト教徒であることによって人々は慰められます。難民キャンプでは、人々がもてる唯一の希望や信頼（trust）は、キリスト教の信念そして神の信仰に尽きるからです。仮に人々が痛みや苦しみを抱えていても、それは神がその人々を見捨てたことを意味しません。神はいつも人々と共にいて、神は人々に永遠の平和をもたらす唯一の存在です。希望を持っていれば、いつかは痛みや苦しみから解放され、普通の生活を送ることができます。もしキリスト教徒として死んだとき、イエスキリストの教えに従っていれば、神は喜ぶことでしょう。私たちは死んだ後にも人生があります。そういった教えによって、人々は慰められるのです。悲しいときにも、たとえば、家族を失ったときにも、あなたを助けてくれるのは神の言葉なのです。聖書に書いてあることによると、もしあなたが神を信じているならば、人生においてまた上昇（rise）することができます。それによって人々は本当に救われます（2018年3月18日の聞き取り調査より）。

以上から、白人牧師の側は、スーダン人を主流社会で要請される規準から逸脱した存在とみなし、同じ教会の白人信者から差異化しようとしていたのに対し、スーダン人牧師の側は、難民としての経験に基づくキリスト教の教えに対する独自の思い入れをもちつつも、白人との融和を重要視し、同じ信念をもつキリスト教徒としての同質性を強調していた。すなわち、白人とスーダン人の間の差異に目を向け、自分たちに白人社会への「同化」を期待する白人に対し、スーダン人が白人と同じ教会に通っていること、そして何よりも白人と同じキリスト教徒としての普遍性を強調することで、彼らが既に主流社会に「同化」していることを訴えようとしていることが窺える。

## 5-2 事例2：J教会（英国国教会）

アフリカ人難民の割合が相対的に高いアデレード北部郊外に位置するこの教会では、約10年前からこの地域に居住し始めたスーダンやブルンジ出身の難民への支援が行われて

21 この牧師は、ウガンダの難民キャンプでの生活を経た後、1999年に人道ビザの申請が許可され、兄弟姉妹と共に渡豪した。渡豪後は、移民・難民のための英語のコースを数ヵ月間受講した後、専門学校の看護コースに入学し、コース終了後は老人介護などの仕事に従事していた。調査当時は、アデレード市内の総合病院で看護師として働きながら、大学で神学を学んでいた。



きた。支援の内容は、礼拝の場の提供に加え、英語学習、政府関係の書類作成、住宅の売買に関するサポートなど多岐にわたった。さらに、女性に裁縫の技術を習得させ、主流社会での経済的自立を支援する裁縫プログラムや、オーストラリア生まれのアフリカ人難民の子供たちの社会統合を支援するための若者プログラムも提供してきた。この教会では現在、土曜にブルンジ人による母語での礼拝が行われ、毎回 10 人程度の人々が参加する。一方で、日曜に行われる白人を中心とした英語の礼拝に参加するブルンジ人が 10 人から 30 人程度存在する。実際に、2017 年 9 月 10 日の礼拝には、約 20 人のブルンジ人が出席していた。スーダン人に関しては、近年、スーダン人の牧師が別の教会で独自の礼拝を開始したのを機に、参拝者はその教会へ通うようになった。

ブルンジ人をめぐる現在の社会的・経済的状況について、この教会の白人牧師 A 氏（50 代男性）は、彼らは難民として渡豪してきた当初に比べ、現在では自分の家や車を持ち、職もあり、互いに頼り合えるブルンジのコミュニティが確立されるなど、自立していると評価した。しかし一方で、A 氏は以下のようにブルンジ人には依然として教会の支援が必要であると語った。

彼らのコミュニティのリーダーと話していて気づいたのですが、彼らは主流社会で何が起きているかを理解していません。最近、ホールデン<sup>22</sup>が閉鎖するというニュースがあり、それはこの地域に大きな影響を与えることになるのですが、彼らはそれをよく理解していませんでした。ですので、私が彼らに主流社会で起きていることを理解する手助けをしています。また、コミュニティのリーダーに、若者にすぐに仕事をやめないよう伝えるようにと言っています。彼らは次の仕事が見つかる前に今の仕事をやめてしまうことがよくあるからです。次の仕事が見つかるまで、今の仕事をやめてはいけなくと教えています。というのも、雇用状況が厳しくなると、彼らの英語はアングロ系オーストラリア人ほどうまくないので、レイシズムがあるとは言いたくないのですが、レイシズムがあると必ず標的にされるからです（2017 年 9 月 8 日の聞き取り調査より）。

また、同教会の別の牧師 B 氏（40 代男性）は、ブルンジ人の仕事に対する考え方について次のように語った。

彼らは仕事をやめても、福祉金<sup>23</sup>での生活に戻ればよいと思っています。仕事は、

22 アデレード北部郊外に製造工場を有するオーストラリアの大手自動車製造業者である。同社は、近年の国産車の売り上げの減少や、継続的なオーストラリアドル高および政府からの補助金の減額などの影響により、2017 年に製造工場を閉鎖した。製造工場は、地域住民に主要な雇用機会を提供していたため、工場閉鎖のニュースは地元で大きく取り上げられた。

23 オーストラリアで 22 歳から 64 歳までの失業者のうち、収入または財産が所定の額を下回り、求職中であることを証明できる人々に支給される手当 (Newstart Allowance) のことを指す。支給額は申請者の家族構成にもよるが、単身者の場合、2 週間で約 550 オーストラリアドル（約 4,600 円）が支給される（2018 年時点）[Australian Government, Department of Human Services]。

現実的に必要であるというよりも、選択できるボーナス（optional bonus）と思われているのです。ですから、彼らは、ある仕事が好きではないと思うと、やめて少し休憩して、福祉金を得てから次の仕事を考えようとするのです。でも仕事を得るのは難しくなっています。年を取るほど仕事を得るのが難しくなります。また、ずっと家にいると、英語力が落ちるので、英語力を上げることもできません。それは問題となるのです（2017年9月8日の聞き取り調査より）。

この教会では、ブルンジ人の主流社会への「社会統合」を支援するためのプロジェクトを立ち上げたが、「文化的な理由」でブルンジ人からの協力を得られず、支援が打ち切られたこともあった。その時の状況についてB氏は次のように語ってくれた。

白人がいくつかのプロジェクトにおいてブルンジ人を支援しようとしていましたが、うまくいきませんでした。白人の側はうまくいくかもしれないと思っていたのですが、ブルンジ人にはそのように受け取られませんでした。それでプロジェクトは終わりました。私たちは彼らを助けるために一生懸命に頑張っているのですが、うまくいかなければもう一度挑戦しようとは思いませんし、一生懸命に頑張るのをやめてしまいます。初めて難民や助けを求めている人を見たら、助けたいですね。でもうまくいかなければ——多くの場合、文化的誤解のためにうまくいかないのですが、もう助けるのをやめようと思います（2017年9月8日の聞き取り調査より）。

024

白人による支援がブルンジ人に受け入れられなかった理由について、A氏は次のように振り返った。

問題の一部はまた、支援のアプローチの仕方にもあると思います。というのも、白人の側は、とても家父長的なことがありました。アフリカ人は新しい国に初めて来て、当惑しているときに、子供のように扱われるのです。でもこちらで生活を確立するにつれて、自分たちは大人なのだから、物事のやり方を知っていると思うようになります。でも白人の方は、相変わらず親のように振る舞おうとしました。それでアフリカ人の方は、「私たちは30代や40代にもなって子供のように扱われるなんて。自分たちなりの物事のやり方を知っているのに」と思うようになります。それが対立の原因でした。それはレイシズムなのか世代間の問題なのかわかりませんが、ブルンジ人は大人なのに、白人は親であろうとしたことです。ですので、プログラムの中では、ブルンジ人に彼らが何を必要とし、何を次のステップと考えているのか——そしてそれは私たちの考えていたものと違ったわけですが——について彼らの言うことをよく聞くようにしました（2017年9月8日の聞き取り調査より）。

A氏は、このようなブルンジ人に対する白人側の態度をめぐる問題について、ブルンジ・コミュニティの人々と交流する中で学んだという。その時の状況について次のように

説明してくれた。

彼らの文化では、彼らが私たちとの間に問題がある場合、私を家に呼んで、食事をして、一緒に時間を過ごし、そして帰る直前になって初めてその問題について教えてくれるのです。彼らはまず関係を築いてから、問題について話そうとします。彼らにとって関係を維持することはとても大切なことなのです。それは私たちのコミュニティにとって良いことです。彼らは私たちの文化を学んでいます、私たちも彼らの文化を学んでいます（2017年9月8日の聞き取り調査より）。

この教会の牧師は、ブルンジ人を「自立している」としつつも、人々が完全に「社会統合」を果たしていないとし、人々が「社会統合」を果たすための様々な助言を与えていた。ここで「社会統合」の基準とされたのは、主流社会の事情に精通していること、仕事を継続して経済的に自立していることであった。仕事に不満がある場合でも容易に仕事を辞めてはいけなとするA氏の助言からは、雇用の場において脆弱な立場にある難民を不当な差別から守ろうとする意志と同時に、難民としての立場をわきまえた上で、主流社会が要請する仕事に従事することを期待する主流社会と同様の考えの双方が垣間見える。また、白人側が提供する善意や支援を、白人が期待する形で難民が受け取らない場合、支援自体を取りやめようとする姿勢は、見返りのない贈与としての支援が、それを提供する者の道徳的衝動に依拠することを顕著に示している。ここでB氏をはじめとする白人のメンバーが期待していたのは、自分たちの提案を難民がそのまま受容することであり、難民が自分たちの提供する支援や礼拝のやり方を受動的に享受する存在であり続ける限り、支援は継続されるが、そうでない場合は「文化的誤解」を理由に支援は容易に中止されるのである。

しかし一方で、A氏の語りからは、教会の外でブルンジ・コミュニティの人々と共に時間を過ごす中で、人々が教会や白人に望むことを理解し、それまでの白人中心的な支援のあり方を自省しようとする姿勢がみられる。それは、支援の一方的な与え手としての主流社会と受け手としての難民という従来の関係を超えて、教会の対等なメンバーとしてのブルンジ人との交流を通して新たな関係を築こうとするものであるともいえる。そして「私たちも彼らの文化を学んでいる」という語りには、ブルンジ人による主流社会の文化への一方的な適応を前提とした同化主義的な「社会統合」とは異なり、主流社会の人々と難民の双方による文化適応に基づく双方向的な「社会統合」を試みようとしていることが窺え、そこには難民と主流社会の多様な関係の可能性が示唆されているといえる。

他方、この教会に通うブルンジ人にJ教会での白人との経験について尋ねると、人々は一様にして自分たちは教会との間に何も問題がないことを強調した。たとえば、教会に通い始めて約10年になるある男性は、教会から受けた支援について次のように語ってくれた。

彼らはとても親切です。私が初めてこの教会に来たとき、彼らは私が家から教会に来

るための移動手段を提供してくれました。私たちには車がなかったので、彼らは私たちを車に乗せてくれて、教会に来れるようにしてくれました。日曜は礼拝に行って、同じコミュニティの一員としてモーニングティを飲んで、夕食を共にします。私はこの教会との間に何の問題もありません（50代男性、2017年9月10日の聞き取り調査より）。

さらに、この教会での若者グループのメンバーであるブルンジ出身の高校生は、教会について次のように語った。

私はこのグループに入って6年くらいになります。というのも、私たちにはみんなが集まって会える場所がないからです。この教会の人々はとても親切で、彼らは私のことを助けてくれました。彼らは聖書について私たちが理解できるように教えてくれました（10代女性、2017年9月8日の聞き取り調査より）。

上記の語りは、白人からの支援に対する純粋な謝意とも捉えることができるが、教会とブルンジ人との間に存在する無償の支援の「贈り手」と「受け手」という力関係を考慮すると、教会側が期待する助けを必要とする難民あるいは白人の支援に感謝する難民のイメージに即した語りであり、それは主流社会が理想とする難民像に合致しているともいえる。その背景には、長年にわたって教会からの支援を享受してきた難民にとって、支援の提供者に対し支援内容や自集団の扱いについて不満や要求を述べることは困難であることが予想される。

しかしながら、ブルンジ・コミュニティの人々がA氏のような自分たちの声に耳を傾けてくれる白人牧師を自分たちのコミュニティへと呼び込み、関係を築く中で、自分たちに対する白人の家父長的態度の問題について気づかせたことからわかるように、人々はあくまでも白人との融和を志向しながら、その中で自分たちの要求を伝えるという姿勢をとっていた。このことは、現在、オーストラリアのメディアでアフリカ人難民が否定的に表象され、主流社会においてアフリカ人難民に対する嫌悪感が醸成される中で、人々が今後もオーストラリア社会に滞在し続けるために取り得る最も穏当で現実的な適応戦略と考えることができる。

## 6 結びに代えて

オーストラリア主流社会においてアフリカ人難民は、トラウマを抱えた脆弱な犠牲者かあるいは暴力的な他者の二分法に基づいて認識されてきた。しかし一方で、アフリカ人難民に内在するとされた暴力性も難民という立場に由来する脆弱性ゆえに生成されたものとされ、難民が孕む暴力性と脆弱性は不可分の関係にあったといえる。こうした認識の根底には、アフリカ人難民が内戦を生き抜いてきたという特異な経験により、主流社会における「正常性」から逸脱した存在であるため、主流社会に対して潜在的な脅威となり得ると



いう想定があった。このような脆弱性と暴力性の関係を反映し、主流社会におけるアフリカ人難民に対する否定的態度も肯定的態度も、アフリカ人難民の脆弱性を前提としており、脆弱性に基づく難民性が主流社会のメディアを中心に構築され、強化されているといえる。さらに、アフリカ人難民を主流社会への脅威となる暴力的な存在としてみなす場合も、アフリカ人難民の暴力性を否定し、彼らのおかれた状況に同情的な態度を示す場合も、アフリカ人難民を母国での戦争や難民キャンプ、さらに渡豪後の難民拘留所での並外れた苦難の経験者として他者化している点では共通していた。

このような脆弱性による難民の他者化は、教会における支援活動にもみられた。本稿で取り上げた2つの教会は、アフリカ人難民の「社会統合」に向けた支援を行う中で、彼らの主流社会への適応の度合いを監視し、評価するという役割を果たしていた。いずれの教会も、アフリカ人難民を自立し、社会に適応していると評価しながらも、彼らに対し、時間厳守、訛りのない英語、勤労の重要さなど白人主流社会で一般的に要求される文化的価値観や行動様式の習得を期待していた。このことから、やはり「社会統合」では、アフリカ人難民による一方向的な主流社会への適応が前提とされていたといえる。また、アフリカ人難民と白人の関係については、S教会の場合は、アフリカ人難民の孤児の救済や日常的な生活支援など、支援の与え手と受け手という関係の下での交流は行われるが、慣習的に行われる礼拝の場では、キリスト教信者としての両者間の接触は限定され、その原因は「文化的違い」に帰せられた。また、J教会についても、白人が提供する支援を期待する形でアフリカ人難民が受け取らない場合、やはり「文化的違い」を理由に、支援が断念されるなど、両者は支援する側とされる側という力関係を離れて交流する場は見受けられなかった。

互いに対する態度については、白人がアフリカ人難民を同じキリスト教徒でありながらも、支援が必要な脆弱な他者として自らと差異化するのに対し、アフリカ人難民の側は白人への謝意を示し、「同じ」キリスト教徒として白人との同質性を強調しようとしていた。その背景には、アフリカ人難民が長年にわたって白人からの支援を享受する中で形成された力関係の下で、寛容さへの謝意や白人への従順さなど、白人がアフリカ人難民に対して抱く「脆弱な」難民像に即した言動をとることを暗黙のうちに要請されていることが窺える。

このことから、アフリカ人難民は、一見白人との間に形成された力関係を受け入れているように思われるが、白人の支援に感謝し、白人との融和を志向する、主流社会にとって理想的な難民の姿を演じることは、彼らがオーストラリア社会で安全に生きるための現実的な戦略であったともいえる。その意味で、難民をめぐる脆弱性とそれに伴う難民のイメージは、メディアや教会関係者のみならず、アフリカ人難民自身によっても構築されていたといえる。

しかしながら、教会における白人との相互作用の中で、アフリカ人難民は単に白人からの支援を受け取るだけの受動的な存在ではなかった。白人からの支援に感謝しつつも、白人牧師との関係を築く中で自分たちの要求を間接的に伝えるという手段をとったブルンジ・コミュニティの人々の姿勢からは、限られた範囲の中で支援する側と支援される側の

力関係から脱却しようとする人々の意志を読み取ることができるのである。

本稿で取り上げた白人支援者に対するアフリカ人難民の対応には、Maroussia Hajdukowski-Ahmed が意味するところのレジリエンスを見て取ることができる。彼らは、自分たちのことを「文化的違い」を理由に差異化しようとする白人の権力に真っ向から対峙するのではなく、自分たちを支援してくれた白人との対話的な相互作用を通して、脆弱な難民を演じ、良好な関係を築きながら自分たちの要求を伝えようとしていた。それはオーストラリア社会で生きることを選択したアフリカ人難民が、主流社会で生き抜くためにとった現実的な対応ともいえる。そして、そのような対応は今後、主流社会と難民の双方による文化適応を志向する白人の協力を得ながら、両者間に支援の与え手と受け手という従来の図式を超えた新たな関係をもたらし可能性を有している。

#### <謝辞>

本稿は、平成 26~29 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）、研究代表者 栗田梨津子、研究課題「オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究」、課題番号 26770300）の助成による研究成果の一部である。

#### <参考文献>

栗本英世 2004 「越境の人類学——難民の生活世界」江渕一公、松園万亀雄編『文化人類学』放送大学教育振興会、pp.138-149。

久保忠行 2010 「難民の人類学的研究にむけて——難民キャンプの事例を用いて」『文化人類学』75(1): 146-159。

Australian Bureau of Statistics 2011 2076.0 *Census of Population and Housing*.

Australian Bureau of Statistics 2018 34120 DO 003\_201617 *Migration, Australia*, 2016-17.

Australian Childhood Foundation 2011 Discussion Paper 14, *Trauma in the Contexts of War and Relocation: Addressing the Needs of Refugee Students*.

Australian Government, Department of Immigration and Citizenship 2012 *Australia's Humanitarian Program 2013—14 and Beyond*.

Brown, Jill, Jenny Miller & Jane Mitchell 2006 Interrupted Schooling and the Acquisition of Literacy: Experiences of Sudanese Refugees in Victorian Secondary Schools. *Australian Journal of Language and Literacy* 29 (2): 150-162.

Colic-Peisker, Val 2009 The 'Visibly Different' Refugees in the Australian Labour Market: Settlement Policies and Employment Realities. In Sonia McKay ed. *Refugees, Recent Migrants and Employment: Challenging Barriers and Exploring Pathways*. London: Routledge, pp.67-83.

Danso, Ransford 2002 From 'There' to 'Here': An Investigation of the Initial Settlement Experiences of Ethiopian and Somali Refugees in Toronto. *GeoJournal* 56 (1): 3-14.

Dau, Atemthii, D. 2015 Bayesian Analysis of the Sudanese Immigrant Youth Crime Rates and the "Likelihood" of Committing Violent Offence than an Australian-Born. *International Journal of*

- Criminology and Sociology* 4: 82-93.
- Department of Immigration and Citizenship 2014 'Community Information Summary: Sudan Born'  
([https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/02\\_2014/sudan.pdf](https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/02_2014/sudan.pdf))
- Fassin, Didier 2012 *Humanitarian Reason: A Moral History of the Present*. California: University of California Press.
- Feldman, Ilana & Miriam Ticktin, 2010 Introduction: Government and Humanity. In Ilana Feldman & Miriam Ticktin eds. *In the Name of Humanity: The Government of Threat and Care*. Durham & London: Duke University Press, pp.1-26.
- Fozdar, Farida 2012 Beyond the Rhetoric of Inclusion: Our Responsibility to Refugees. In Anna Hayes & Robert Mason eds. *Cultures in Refuge: Seeking Sanctuary in Modern Australia*. Farnham; Ashgate Publishing, pp. 49-64.
- Government of South Australia, Multicultural SA 2014 'Burundi: A Profile of Burundi-Born South Australians'
- Hage, Ghassan 1998 *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*. New York: Routledge.
- Hajdukowski-Ahmed, Maroussia 2012 Creativity as a Forum of Resilience in Forced Migration. In Daniel Coleman, Erin Goheen Glanville, Wafaa Hasan & Agnes Kramer-Hamstra eds. *Countering Displacements: the Creativity and Resilience of Indigenous and Refugee-ed Peoples*. Edmonton: The University of Alberta Press, pp. 205-235.
- Jelin, Elizabeth 2009 Victims, Relatives, and Citizens in Argentina: Whose Voice Is Legitimate Enough? In Richard Ashby Wilson & Richard D. Brown eds. *Humanitarianism and Suffering: The Mobilization of Empathy*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.177-201.
- Jok, Madut Jok 2001 *War and Slavery in Sudan*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lino Lejukole, James W.K. 2008 *"We Will Do It Our Own Ways": A Perspective of Southern Sudanese Refugees Resettlement Experiences in Australian Society*. Ph.D. Thesis (University of Adelaide).
- 2013 Falling Through the Cracks: Southern Sudanese Refugees' Experiences of Housing and Accommodation Shortage in South Australia. In Jay Marlowe, Anne Harris & Tanya Lyons eds. *South Sudanese Diaspora in Australia and New Zealand: Reconciling the Past with the Present*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, pp. 116-127.
- Majavu, Mandisi 2017 *Uncommodified Blackness: The African Male Experience in Australia and New Zealand*, Cham. Switzerland: Palgravepivot.
- Malkki, Liisa H. 1995 Refugees and Exile: From "Refugee Studies" to the National Order of Things. *Annual Review of Anthropology* 24: 495-523.
- Marlowe, Jay 2010 Beyond the Discourse of Trauma: Shifting the Focus on Sudanese Refugees. *Journal of Refugee Studies* 23: 183-198.
- 2013 South Sudanese Resettlement: Acculturation Strategies and Social Capital. In

- Jay Marlowe, Anne Harris & Tanya Lyons eds. *South Sudanese Diaspora in Australia and New Zealand: Reconciling the Past with the Present*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, pp. 101-115.
- Marlowe, Jay, Anne Harris & Tanya Lyons 2013 South Sudanese Diaspora in Global Contexts. In Jay Marlowe, Anne Harris & Tanya Lyons eds. *South Sudanese Diaspora in Australia and New Zealand: Reconciling the Past with the Present*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, pp. 1-10.
- Poppitt, Gillian & Ron Frey 2007 Sudanese Adolescent Refugees: Acculturation and Acculturative Stress. *Australian Journal of Guidance & Counselling* 17 (2): 160-181.
- Sandvik, Kristin Bergtora 2009 The Physicality of Legal Consciousness: Suffering and the Production of Credibility in Refugee Resettlement. In Richard Ashby Wilson & Richard D. Brown eds. *Humanitarianism and Suffering: The Mobilization of Empathy*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.223-244.
- Stratton, Jon 2011 Uncertain Lives: Migration, The Neoliberal Exclusionary Order in Australia: Race, Religion and Incarceration. In Jon Stratton ed. *Uncertain Lives: Culture, Race and Neoliberalism in Australia*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, pp. 1-28.
- Suski, Laura 2009 Children, Suffering and the Humanitarian Appeal. In Richard Ashby Wilson & Richard D. Brown eds. *Humanitarianism and Suffering: The Mobilization of Empathy*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.202-222.
- Victorian Equal Opportunity & Human Rights Commission 2008 *Rights of Passage: the Experiences of Australian-Sudanese Young People*  
([http://www.myan.org.au/file/file/Rights\\_of\\_Passage\\_\\_The\\_experiences\\_of\\_Australian\\_Sudanese\\_young\\_people.pdf](http://www.myan.org.au/file/file/Rights_of_Passage__The_experiences_of_Australian_Sudanese_young_people.pdf))
- Wilson, Richard Ashby & Richard D. Brown 2009 Introduction. In Richard Ashby Wilson & Richard D. Brown eds. *Humanitarianism and Suffering: The Mobilization of Empathy*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-28.

#### インターネット資料

- Australian Government, Department of Home Affairs, Immigration and Citizenship  
<https://immi.homeaffairs.gov.au/visas/getting-a-visa/visa-listing/global-special-humanitarian-202#About> 2018 年 12 月 4 日閲覧。
- Australian Government, Department of Human Services  
<https://www.humanservices.gov.au/individuals/services/centrelink/newstart-allowance> 2018 年 12 月 4 日閲覧。
- SALT African Australian News Magazine 2013  
<http://www.saltmagazine.org/unemployment-issues-for-african-australians-in-south-australia/> 2018 年 9 月 7 日閲覧。
- The Association of Burundian Community of South Australia Inc.



<http://www.burundianssa.com.au/wp-content/uploads/2017/11/Burundian-Community-Annual-Report-2017.pdf> 2018 年 12 月 13 日閲覧。

**‘Integration’ of African Refugees into Australia: Focus on the Relationship Between the Providers and the Receivers of Humanitarian Aid**

Ritsuko KURITA

Keywords : African refugees, integration, humanitarian aid, church, Australia

This study focuses on the power relations between the African refugees who resettled in Australia under the humanitarian programme and the Anglo-Australian Church, which provided assistance for their integration into mainstream society. The present study also examines the characteristics of ‘refugee-ness’ and refugees’ responses to this concept. In the mainstream media, the African refugees were associated with vulnerability and violence, as well as deviance of the ‘norm’ held by the Anglo-Australians. Although vulnerability and violence are inseparable aspects, the refugees’ vulnerability was accepted in mainstream society because of the idealised image of refugees who passively receive assistance, show appreciation for acts of kindness, and reciprocate with their own acts of benevolence.

This particular image of refugees was shared by the Anglo-Australian Christians who aided the African refugees and attempted to establish/maintain relations with them as long as they complied with the idealised image of refugees. Conversely, in the event of their failure to do so, they were regarded as refugees who were culturally different, after which relations were severed. Meanwhile, the African refugees attempted to establish harmonious relations through dialogue and interaction with the Anglo-Australians, assuming the role of ‘vulnerable refugees’ and communicating their needs rather than defying the Anglo-Australians. This proved to be the most pragmatic strategy that the African refugees could employ to lead peaceful lives in Australian society. Ultimately, this strategy may have the potential to establish a new relationship between refugees and Anglo-Australians with the assistance of some Anglo-Australians who aspire for cultural modification from both mainstream society and refugees.